

## 「さいたま市」をどんな街にしたいのか

増田 一世

2001年5月1日、大宮市、与野市、浦和市が合併し、さいたま市となった。さいたま市だけではなく、全国で基礎自治体である市町村の合併が進んでいる。

自治体の規模が大きくなるということは、自分たちの暮らしにどんな関わりがあるのか、一体どういう意味があるのか、やどかりの里で活動する私たちは、最近まであまり関心を払ってこなかった。

しかし、ここ数年のさまざまな学習や活動展開の中で、精神障害者が地域でその人らしく暮らしていくためには、精神障害者の問題は地域の中のさまざまな問題の1つであると捉えていかななくてはならない、と考えるようになった。そして、街の中にはさまざまな人がいて、それぞれの生き方があり、それぞれの問題を抱えていることに気づかされてきた。

そうすると、自分たちが活動するこの地域で、どんな人たちが、どんな思いで生きているのか、関心を持たざるを得なくなった。それは障害や問題の壁を越えて、互いの交流を大切にすることだったり、違いに注目するのではなく、共通の部分を意識することであった。そして、横のつながりを作っていくことの大切さを学んできた。その中で、自分たちが活動するこの地域をどんな街にしていきたいのか、ということを考えることの大切さを実感していった。

「地域に根ざす」「街の中でともに生きる」「地域づくり」……そんなことを意識するようになると、住民同士の顔の見える関係、住

民の声が届きやすい自治体の規模の大切さを実感するようになった。この街をどんな街にしていくのか、これは誰が考えていくのかということを考えるようになった。

「大きいことはいいことだ」

というキャッチフレーズが流行したことがあったが、今でも町村合併の潮流の中では、この考え方は全盛期である。しかし、自治体が大きくなることは、そこに暮らす住民にとっては、決していいことではないと、感じるようになった。人間中心で、1人1人の生きざまを大切にしようという発想が基本に座っていれば、自治体の合併は安易には進まないはずである。

自治体が大きくなればなるほど、住民の声は自治体の首長に届きにくくなる。自治体が提供する住民サービスについても、人口が多くなる中で、1人1人の住民にきめ細かな対応が実現されていくのか、とても不安である。

「さいたま市」の誕生で、自分たちの基盤となる地域の問題に関心を持たざるを得なくなった。合併問題に無自覚であったことは反省しつつも、この「さいたま市」をどんな街にしたいのか、真剣に考えるようになった。

横のつながりを意識しつつ、住民の声を自治体に届けていくことの大切さを自覚しなくてはいけない。そして、視野の広い「街づくりのビジョン」を形成していく自らの力量をつけていくこと、自治体で働く人々との協働を実現していくことが、当面の大きな課題である。